

## カコちゃんの記憶

東京都 金指和子

はじめに

昭和十二（一九三七）年三月七日、私は満州国奉天（瀋陽）市琴平町の亀山病院で生まれた。そのときの住所は、奉天市淀町八番地です。父は満鉄職員でした。父の転勤で奉天から鉄嶺に移り、次いで内モンゴルに移り、そこで敗戦を迎えたが、そのときの住所は、満州国熱河省承德石洞子溝の満鉄官舎でした。家族は父、母、兄、私、妹の五人です。引揚げてからは、群馬県伊香保下榛名山の麓にあった十二社開拓組合に入植して、家族と共に開墾をしました。現在は、結婚をして東京の新宿に住んでいます。

父は敗戦直前に現地召集で兵隊にとられ、敗戦と共にソ連軍の捕虜となって、シベリアに送られた。昭和二十二年に、私たち四人が引揚げ帰国し

てから一年後に、父はシベリアから復員してきて、それからが榛名山麓での開墾農家の始まりです。

この苦労記録は、八歳だった私が心に傷を受けたために書くことのできた、言わば戦争後遺症の文です。このお粗末な文章から少しでも平和の尊さ、平和の有り難さの意味を汲みとっていただければ幸いに思います。

私の呼び名は「カコ」ですが、みんなは愛称として「カコちゃん」と呼んでいました。

### 一 私の弟は「平和」

昭和二十年九月、じりじりと照りつける太陽と、「ジー・ジー」と脳天に針を差し込むように響く虫の声の中で、目をつぶると体が大きく揺れている。ハツとして目を大きく見開くと、高梁畑の間から見える太陽がぼやけている。それがそのうちに二つ、三つ、四つと数を増してきて、やがて高梁畑の中に入り込んできたが、色は緑のようだった。

「どん！」という音と同時に、私の体が大きく

傾くと、そのまま母さんにぶつかってしまった。

「和子！ 和子！ 手を出さない」と言う母さんの声がかすかにする。私はふらふらとして母さんに近づいて行つたが、そのとたんにその場に倒れてしまった。というよりも、手を握ってくれた母さんの方が先に倒れたのだった。大きなリュックサックと、その上に乗っている一歳の節子の足が私の顔を直撃し、瞬間に私の意識が戻った。母さんが、異常を感じて地面に伏せたのだった。意識を取り戻した私は、すぐに母さんの右側に伏せた。九歳の兄は、母さんの左側に伏せていた。母さんは、両側の伏せた二人の背中を、着ている服の上からつかんだ。それは、私たちが恐怖心から無意識に走り出すのを押さえるためだった。やがて、遠くからトラックのエンジン音が聞こえてきた。しかし、伏せている私たちの前を、疲れ切った格好の仲間たちは、相変わらず影絵のように通り過ぎて行つた。伏せたときに舞い上がった土ぼこりが、いつまでも顔のまわりを離れな

つた。

時間はどんどん過ぎて行つて、エンジンの音はもう聞こえなくなった。顔を伏せている畑の土が、流れ落ちる汗で色が変わっていくのがわかつた。

「なあんだ！ 気のせいだったのか？ いつまでもこんな所に伏せていると、みんなに追い越されて集団の最後尾になつてしまふね」と母さんは言つたが、それでもまだ背中の手は離さなかつた。しばらくすると、あっちこちから悲鳴が聞こ

えてきた。はつとして、完全に意識が戻った私は跳ね起きようとしたが、母さんの重い手がそれを押さえた。「ダアダアン！ シュルシュルダアダアン！」と、不気味な音を残しながら銃弾が頭上を飛び去つていた。「そのままじつとしていなさい！」と、母さんの低い声が聞こえた。

そのままの格好で生きた心地なくいると「和子！ 和子！」と兄ちゃんの声があるので目を開けると、心配そうに私をのぞき込んでいる、兄ちゃんの顔が目に入った。私は、弾の音でまたまた

気を失っていたらしい。隣に伏せていた母さんの姿が見えないので、「母さんはどこ！」と兄ちゃんに聞いたつもりだったが、喉から声が出なかった。兄ちゃんは、「向こうへ行つた」と言うように指をさしていた。「節ちゃんの面倒をみてね！ カコは母さんの様子を見てくるから」と兄ちゃんに言った。言葉の勢いはよかつたが、立ち上がると「スーッ」と再び意識が遠のくようだった。気を取り直して振り返ると、兄ちゃんが心配そうに私を見ていた。兄ちゃんは疲れ果てていて立てないようだった。私は全身に力を入れて、安心させようと笑つて見せた。

よろめく足を一步一步踏みしめながら、母さんのいる方に向かつて歩いて行つた。「和子！」と叫ぶ母さんの声があるので近づくと、そこには腹を裂かれた瀕死の女の人に、小学校四年生の亜希ちゃんがすがりついて泣きわめいていた。さらに近づいて怪我の様子を見ると、おながが約三十センチメートルぐらい開いていて、その中は血と肉と

土とでぐじやぐじやになっていてよく見えないが、唸り声が凄かつた。この女の人には亜希ちゃんのお母さんで、ソ連兵に襲われておなかから赤ん坊を引き出されて、その代わりに畑の土をつめ込まれたのだということがすぐに分かつた。すると、母さんの声がした。「亜希ちゃんを連れて向こうへ行つていなさい。ここは大丈夫だから！」と。振り向いた母さんの顔は、目が吊り上がっていて、今まで見たこともないような顔で恐ろしかつた。

私は、泣き叫んでいる亜希ちゃんの手を引いて歩き出した。日ごろは気の強い亜希ちゃんも、母親の惨状を見てしまったら形なしで、このときばかりは年下の私の方がしつかりしているような気がした。

しばらく歩くと、高粱畑を通しては仲間の姿が見えなくなる所まで来てしまったが、これ以上離れることは、集団の決まりで禁止されていた。畑の中で迷子になってしまうと、出発のとき置き去りにされてしまうからだ。置き去りになるとい

ことは、死ぬことを意味している。

ところが、亜希ちゃんは何を思ったのか、私の手を引いて畑の中を勢いよく歩きだした。母さんからも、集団からもますます遠くなってきて、もう人の声も聞こえない。茂った高粱を掻き分ける音と、「じいーつ」と鳴く虫の音だけがしていて、風は無く夏日の太陽の光がちくちくと肌を刺すようだった。多分、四十度以上はあるのだろうか、汗が目に入って痛かった。「これ以上はだめだよ！帰れなくなるよ！」と私は力を込めて言った。すると、亜希ちゃんは私の手を離して、そのまま一人で先へ行ってしまった。私はどうしてよいのか迷ってしまったが、母さんに言われたとおり、とにかく亜希ちゃんの白いシャツがやっと見える距離でついていった。

もうどれだけ集団から離れたのか分からず、心細くなっていた。満州ひばりが高い空で鳴いている。すると、亜希ちゃんが止まったので、私は近づいて声をかけた。「早く戻ろうよ。みんなが心配

するよ！このまま置いていかれるよ！」と半ば泣きべそをかきながら言ったが、亜希ちゃんは無言だった。「……」さらに私は「この辺りは狼がうろついているかもしれないよ。怖いよ。聞いているの！」と続けて言った。亜希ちゃんは、私の言葉には返事もしないでそこにしゃがみ込むと、高粱の葉で覆った小さい塊を指さした。「ほらカコちゃん、ここよ！」と言って高粱の葉をどかした。そこには死んだ赤ん坊の姿があった。それは、さつきソ連兵が亜希ちゃんのお母さんのおなかを裂いて取り出した赤ん坊だった。体の真ん中に銃剣で突き刺した傷があったので、すぐに分かった。あふれ出た血が体一面にこびりついていて、その上から畑の土がかけられていた。まるで土で作ったお団子のようなだった。「なんでこんな所に？」と、口の先まで出ていた言葉も発することができなかった。亜希ちゃんは着ていた白いシャツを脱ぐと、「カコちゃん、これを持って向こうをむいていて」と言って白いシャツを私に渡すと、さらにその下

に着ていたランニングシャツも脱いだ。「亜希ちゃん、まだ！」と私は後ろ向きで声を掛けたが返事がないので、半分体の向きを変えて横目で亜希ちゃんの方を見た。亜希ちゃんは、赤ん坊についている血を自分の舌でなめては下着で拭いている。もう土はついていなかったので、赤ん坊の肌がだんだんと見えていた。

大分時間が経っているのですが、私は心配になっていた。みんなに置いていかれるのが怖かった。それからさらに十分ぐらいの時間が過ぎたところで、私はますます不安になって「もう見てもいい！早く戻ろうよ！」と言って振り返り、亜希ちゃんをまともに見た。亜希ちゃんは、赤ん坊の負った銃剣の傷口に手の平をあてて、「いたいの、いたいの、飛んでいけ！」と言って、手を空に向かって二度、三度と振り上げた。そう言った後で、今度は「お風呂に入って、きれいきれいにしようね！」と言うが早いかパッと自分の下穿きを脱いで、赤ん坊をしっかりと抱いて土の上に座った。そのあ

と、今度は自分の下穿きを赤ん坊にはかせて、私の方を向くと「私のシャツを渡して」と言って、こっちに手を出した。私は横を向いたまま手渡したが、亜希ちゃんはそのシャツで赤ん坊を包むと、土の上に寝かせて高梁の葉で覆って、さらに周りの草をむしり取っては、その上からかぶせた。「さあ行こう！」と亜希ちゃんの声したが、私は横向きになったまま、「亜希ちゃん、どうするの。裸だよ！」「むこうに置いてきたリユクサツクの中に、お母さんの下穿きとシャツがあるから大丈夫だよ」と言うので、私は「自分の着替えはどうしたの」と問うたが、亜希ちゃんは「途中で小さい子にさせてあげちゃったの」「あのお、兄ちゃんのがリユクサツクにあるはずだから。男のだけれど我慢してね」「ありがとう。あとで洗って返すからね。私が死んだら、かまわずはがしてちょうだいね。それで返したことにしてね」「亜希ちゃん！」と、私は何とはなしに声を掛けた。「なに？」と言って私の方を見た亜希ちゃんの顔は優しかっ

た。「あのお、死んだらいやだよ」と私が言うのと、「それは無理、無理」と亜希ちゃんは初めてにっこりと笑った。そして足早に歩きだした。「亜希ちゃん！ どうして赤ん坊がここに捨てられているのが分かったの」と聞くと「うん。ソ連兵が赤ん坊を投げ上げて銃剣で刺したのを、草の中から見ていたのよ。それからそのあと銃剣に刺したまま去って行ったので、私は取り戻そうと思つてソ連兵の後ろから付いて行ったの。そしたらトラックが去ったあとに、平和が転がっていた」「平和って何？」「亜希が赤ん坊に付けた名前よ。さ、急ごうよ」と言つて亜希ちゃんは大腿で歩き出した。「そんなに速く歩いて、方向をまちがえたら大変だよ」「カコちゃん、ソ連兵の通つた足跡を見なさいよ、みんなのいる所までつながっているはずだよ。それと、高粱の幹がいろいろな向きに傾いているでしょう。ソ連兵の奴らが四十人で掻き分けながら通つた証拠だよ。それに青くさい匂いがするでしょう。植物は踏みつけると、その切れた所からに

おいを出すのは知つているでしょう。ほら、高粱と雑草のにおいがするでしょ」「本当だ。亜希ちゃんは夜でも迷子にならないね？」

「カコちゃん。周りに山や建物や木のような目が無いときは、作物の種類や雑草の高さや色、傾き具合をよく見て覚えておくことだよ。」「この高粱はみんな同じ太さで、まっすぐ立っているよ。曇っていたら方向がわからないよ。」「カコちゃんは毎日高粱の幹をかじつていても、何も気が付かないんだな。どんな色をしているか覚えている？」「私は返事にちよつと困つたが、「赤茶色かな。いや紫かな。茶に黒いたて縞が入っていたかな。」「そうよ。アズキ色よ。でも陽の当たっている方が色が濃いから、お日様が出ていなくてもすぐわかるのよ。」「私は「小学四年生つてすごいんだな」と感心してしまった。「これは、全部難民になつてからお母さんに教えてもらったのよ。」「カコの母さんは、物の隠し方とか、人の隠れ方しか教えてくれなかつたよ」

しばらく歩いて行くと、私たちみんなが歩いてきた幅一メートルぐらいの一本道に出た。「ここに集合」と言う班長さんの声が遠くから聞こえてきた。私たちはほっと安心した。これで取り残されることはないと思うと、今まで張りつめていた気持ちが一瞬に緩んで来たが、怪我をしている人を一箇所に集めているようだった。亜希ちゃんも急に無口になり、歩く足も速くなった。

私は無事に兄ちゃんと節子のいる所に戻った。母さんもいた。母さんは、私が遠くに行っていたことを聞こうとはしなかった。母さんも、今戻って来たばかりだったそうだ。今まで、怪我をした人たちの面倒をみていたらしい。兄ちゃんは「これから三日間の野営だつて。田中のお爺ちゃんが言ったよ。」と声をかけてくれた。「ああ、また怪我人の唸る声をひと晩中聞くのかな」そう思っているうちに、今までの疲れが出たのか眠くなっているように、地面が転がった。空気がくるくる回っているような気分になった。周りの景色が薄暗くなっている、

私は気を失っていくんだ、いや死んでいくんだ、と漠然と思うと、悲しくもないのに涙が流れてきた。

「和子、起きなさい！」と母さんの声が夢うつに聞こえていた。今度は「和子、朝だよ。三分のちに出発だよ！」と兄ちゃんの声があった。その声で、ぱっと目が覚めた。田中のお爺ちゃんは、たち上がると「出発！」と大声で叫んだ。私たち家族四人は、お爺ちゃんのすぐ後ろについて歩いた。途中でみんなに追い越されるからだ。

承徳組は、もう四十人ぐらいいしからない。承徳の街を出るときには、一列車分二千人ぐらいたのちと思うと、寂しくなってきた。私は下を向いて歩いていった。ふっと頭を上げると、いつのまにか亜希ちゃんが私の前を歩いていたので、私は近づいて声をかけた。「亜希ちゃん、あの赤ん坊はどうなるのだろうね！」と話したが、亜希ちゃんは黙ったまま歩いていった。母親の白い半袖シャツが膝までたれ下がり、首の周りは大きすぎて片方の

肩が出ている。その上から真つ赤なりュックサックを背負っていた。赤いリュックサックと、その下から見える白いシャツとが、生き物みたいに逆に揺れ合っている。ふと気がつくくと、雀の群れが騒がし気にさえずっている。もう夕方が近くなっていた。「あのお、亜希ちゃん！ 赤ん坊は埋めた方が良かったんじゃないの。カコは土をかけようと思っただけで、せつかく亜希ちゃんがきれいにしていたんで、言えなかつたんだよ」「カコちゃん優しいんだね。ありがとう。心配はいらない、もういいんだよ！」と言って、亜希ちゃんは目を細めて私の顔を見ていた。その目は、もう落ち着いて澄んでいた。そして、「大人は役に立つことだけをやる。でも、子供には子供のやり方があるんだよ」「子供のやり方ってなあに?」「お母さんのおなかの土を出して、弟の平和を入れてきたのよ」「ええっ」と言ったまま、わたしは口をつぐんだ。

## 二 二十ミリ機関砲

昭和二十年九月、承德から出発した私たち難民は、来る日も来る日も、晴れていても雨が降っていても歩き続けた。亜希ちゃんのお母さんがソ連兵によっておなかを裂かれてから、十日が経っていた。珍しく高粱畑の中に、木造板張りの小屋が一つ見えてきた。近づくと、小屋の前はほぼ二十メートル四方ぐらいには農作物はなく、収穫するときの作業広場になっていた。小屋は、収穫した農作物を一時的に入れておくためのものなのだろうか。小屋の周りに張ってある板は隙間だらけで、とても人の住めるものではなかった。私たち四十人ぐらいの難民が近づくと、小屋の中から人声がしてきた。板の隙間からのぞくと、中には人がいっぱい入っているのが見える。よそからの難民が、九月の厳しい暑さをさけて休んでいるようだった。

結局、私たちは中には入れずに、その前の広場で「大休止」をとった。一時間の休憩である。みんなは、それぞれに日陰を求めて高粱畑の中など

に入って行った。用を足す者、軟らかそうな高粱の幹を捜す者、仮眠の場所を求める者など様々で、みんなは分散していた。私と亜希ちゃんは、何をすることもなく広場の真ん中に座っていた。高粱の葉で作った帽子をかぶっていたし、この広場は風通しが良かったので気持ち良かった。「亜希ちゃん、何してんの？」と問い掛けたが、返事なかった。亜希ちゃんは、死んだお母さんの頭から切り取った髪の毛を、リュックサックから取り出すと、しばってある紐をほどこいていた。そこへ兄ちゃんが来た。亜希ちゃんは、兄ちゃんに「背中に御守りがまわつちやったから、取ってちょうだい」と言ったが、兄ちゃんは「いやだよ！女の背中に手なんか入れられないよ」と一言で断った。「役立たず」と亜希ちゃんは言い返した。

「ええっ、何か言った？」「いや、なにも」仕方がなかったのか、亜希ちゃんは自分で紐を引っ張って、御守りを取り出した。御守りの中には、お金が詰めてあった。亜希ちゃんは、次々と御守り

を取り出した。御守りは三つあった。それぞれの御守りの中に詰めてあったお金を引き出して一つにまとめ、お母さんの遺髪の中に丸め込んで、その上から赤い花柄のハンカチで包み、それを紐でぐるぐる巻きにして縛った。私は、「なるほど、亜希ちゃんは頭がいいんだね。でも、もつとしっかり包まなくちゃあ。両端から髪の毛が出てくるよ」と、勝ち誇ったように声を大きくして言った。亜希ちゃんは落ち着いた声で、「こうにしておけば、ソ連兵が紐をほどかないでしょう。わざと毛を出してあるのよ」との返事に、私は子供心にも感心してしまった。「カコちゃん、ポケットの薬きょうを出しなさいよ」「ええっ」「十三ミリの薬きょうを持っているでしょう。」「亜希ちゃん、なんで知っているの？」「この間、それで地面に絵をかいていたでしょう。私は見ていたのよ。その中にお金を一枚入れてあげるから、出しなさい。一番高額のお札よ。だれにも言うんじゃないよ」足もとでコオロギの声がしていた。「何で、くれるの？」

「小学二年生なのに、よく頑張ったからね。もう歩いている子供は、亜希と兄ちゃんとカコちゃんだけだよ。だから、ご褒美としてあげるの」と、優しい顔をして言った。「どうしてお母さんに言っただけなの」「お母さんと別れることがあったら、そのときにそのお金が役に立つよ。こっちはお兄ちゃんの方よ」「カコは一人ぼっちになんかならないよ。」「私を見なさい。一人になってしまったでしょ」「そのようになつたら亜希ちゃんに付いていくから、一人ぼっちではないよ」「それはだめ。私が先に死ぬかもしれないから」と、遠くを見つめながら話している亜希ちゃんの顔は、独り言を言っているようだった。高粱の穂先が、右から左へと順々におじぎをし始めていた。風が強くなってきたのだ。やがて、亜希ちゃんの髪の毛がめちやくちやに揺れて、顔におおいかぶさっていた。「カコちゃん」「ええっ、なあに」「いいから、よく聞くのよ。これは母さんがいつも私に言っていたことだけど、人間は最後は一人で生きて

いくことになるよ、いつも心の中で用意をしておくことが必要よ。そうすれば、みんなを助け合っていることの有難さを感じることができるから」

「私は子供だから、よく意味が分かんないよ」「そうか。それじゃ、亜希ちゃんはいつもカコちゃんが見える範囲内で歩いているから、もし見えなくなつたらすぐ探してね。そして、この髪の毛の中に入っているお金を使って生き抜いていくんだよ。髪の毛は、日本に帰ってから内地の土に埋めてね」「いやだよ。それは自分の母さんのだから、自分で日本の土に埋めればいいんだ。亜希ちゃんが死んだら、カコが髪の毛を切つて日本に持つて行くからさ」「そうか。実はね、この中には私の髪の毛も半分入っているんだよ」そんな話をしていると、後ろの方で「かたん、かたん」と聞きなれない音がした。はっと思つて振り返ると、あの小屋の入り口の辺りから、こつちに向かつて金だらの大ききの、独楽こまのような円錐形のものがある。それが知つたとき、一瞬体がかたくな

った。目の前、数メートル近くまで転がってくる  
と、それが十個くらいに分かれて、やがてそれぞれが爆発して一メートルぐらいの高さに火を吹き上げた。同時に、小屋からは悲鳴をあげながら難民たちが走り出してきた。次から次と、みんなは全速力で私の横を走り過ぎた。みんなは前の高粱畑に向かっていた。その間、わずか二十メートルぐらいの距離だった。背負っているリュックサックが炸裂し、もんどりうって倒れる人。足もとでは、十個に分かれた金属の塊が火を吹き上げている。私はとつさに判断して、そして叫んだ。「新型地雷だ！ 新型地雷だ！」すぐに学校で習った通りにその場に伏せた。以前、承德小学校二年一組担任の西川先生が、授業のときに次のようなことを話していた。「地雷には二種類ある。一つは戦車をひっくり返す強力なもので、もう一つは人間を倒すものである。この人間を倒す地雷は通常の地雷のほかに、万年筆やお人形やお菓子の箱や、それに機関車や飛行機などのおもちゃの形をしたも

のなど、いろいろなものがあるから、気をつけなさい。何だか判断のつかないものがあつたら、大人に知らせなさい。そして異常を感じたら、まずすぐにその場に伏せて様子を見ること」と、教えられたとおりの動作をして、その通り伏せた。だから、一人だけその場にとり残されてしまった。みんなは、悲鳴をあげながら高粱畑の中に逃げ込んでいた。

周囲の状況から、なんとなく危険が迫っているのを感じた。「誰かが私を見ている、そして狙っている。早くみんなの所に行かなければ」と、私はすぐに立ち上がった。すると、私の後ろから足音がしてきた。振り向くと、母親らしい女の人が二歳くらいの子供の手を引いて、逃げて来るのだった。女の人は黒いシャツに黒のズボンをはいているが、右肩辺りのシャツが破れて、布きれがひらひらしている。乾燥しきった地面から砂ぼこりが舞い上がって、二人の姿が影絵のように見える。この人は、この町の者だろうと思った。幼児は、

左手に不釣り合いな大きな布製の人形をつかんでいた。よちよちと走るたびに、大きく揺れている。真つ白いパンツの両脇から、ゴム引きのおしめカバーが見える。幼児はがに股で、それでも一生懸命走っている。

突然、その幼児の頭の三分の一が砕けて飛んでいた。泣き声を聞いたが、それは私の一メートルぐらい右側前方での出来事だった。それからすぐに、多分一秒も経っていないと思うが、幼児の頭全部が砕けてけし飛んでいた。飛び散った肉片が、銀紙をまいたようにキラキラとしながら光って空に舞っている。首だけになった切断部から、泣き声が出ているようだったが、それは気のせいだったろうか。喉に右あごだけが付いており、真つ白い歯が並んでいるようだったが、それは幻想であったかもしれない。続けて幼児の右肩の肉がけし飛んだ。幼児はその場に倒れ、手を引いている母親も倒れていた。私はびっくりして、再びその場に伏せた。そのとき、倒れた母親を見た。なんと、

シャツの肩の布がヒラヒラしていると見えたのは、実は千切れた肉や皮がボロ布のように波打っていたのだった。出口から数メートル離れていたが、あんな体でよくここまで走れたものだと、気が遠くなりながら思った。

「オーイ、カコちゃん早く来い！」と誰かが呼んでいる。地面に伏せていた顔をあげると、なんと目の前数メートルにある高梁畑が、ほぼ十メートル四方にわたって嵐になっている。幹や葉が粉々にくだけ、それらが互いにつつかり合って渦を巻き、ほこりでけむっていた。どこかで見たことがあると思った。そうだ、「飛行機の機銃掃射だ」と合点した。ふと私は振り返ると、なんと後ろに大きな戦闘機がいるではないか、はっと思つて頭をさげると、その瞬間物凄いうなりをあげて、戦闘機は飛び去って行った。頭すれすれだった。高梁の穂先が、いつせいに飛び去った方に大きく波打っている。あの転がっているように見えたのは、地雷ではなかったのだ。あれが機関砲なのか。

「弾が物に当たると炸裂する」と西川先生が言っていたことを思い出した。「日本の荒鷲が強いのは、炸裂弾を持っているからだ」とも言っていた。でも敵が持っているとは知らなかった。

「おい、みんな。小屋の左側に移れ」と責任者らしい中年の人が叫んでいた。「カコちゃん、今なら大丈夫。こっちへ来い」と言う田中のお爺ちゃんの声がしてきた。「ハイ！」私は声のする高梁畑の方へ走ったが、敵機の機銃掃射と低空飛行のために舞い上がった砂ぼこりで、畑の中にだれがいるのか、どこにいるのかもわからなかった。

「お爺ちゃん！　どこなの。飛行機の音が聞こえなかったよ。どうして」と言いながら、お爺ちゃんを探した。「あと三十秒で旋回してくるぞ。みんなと一緒に左側に移れ」とお爺ちゃんは叫ぶと、同時にバツとズボンを下げてふんどしを抜き取った。そして高梁の幹に紐で縛った。そのふんどしの先が、私の頬をなげていた。「白旗を見せても駄目だ。早く逃げよう」千葉県出身者の集団の責任

者が叫んでいた。この人たちは、県単位で移動している難民なのだ。こっちは承徳という街単位だ。田中のお爺ちゃんは、「奴らは、このふんどしを目標にして撃つてくる。あなたも脱げ」と言っていたが、その人は「私のはパンツだから紐がついていないよ」と問答していた。その直後に、私は高梁畑の中を小屋の左側へ向かって走っていた。縦長の小屋の後ろの方から、再びさっきの戦闘機が近づいて来るのが見えた。かなり遠くから撃ちだしているようで、全弾が小屋に命中していて柱がぐちゃぐちゃになり、屋根が「バサツ」と音を立って地面に落ちた。あたりは舞い上がった砂ぼこりがいっぱい、何も見えなくなった。戦闘機は、低く飛んで私の目の前を通過したので、パイロットの顔がよく見えた。飛行帽のメガネを上げて地上を見おろし、お爺ちゃんのふんどしとその人のリュックサックと、脱ぎ捨てたパンツを確認しているようだ。小屋の右側に難民が集まっているように見せるのだ、と言う二人の作戦が、果してそ

の通りにいかどうか危険な賭けだった。「来るぞ！ 今度は右側の高梁畑だ、みんなそっちに逃げろ」とお爺ちゃんは私の頭を押さえて叫んでいた。よそのおじさんも、大声でみんなに「もっと早くへ行け。広く散れ」と指示していた。

三十秒経つと、また戦闘機が空から一気に襲ってきた。思ったとおり、小屋の右側が嵐のように渦を巻き、砂煙が十メートル以上も舞い上がっていた。「やった、やった。お爺ちゃんが勝ったバンザイ！」と兄ちゃんが戦闘機の後ろに向かってアカンベーをしながら叫んだ。あたりには火薬のにおいが漂っている。「また来たら、どうするか」と、おじさんがお爺ちゃんに声をかけていた。「そのときは、ふんどしとパンツに火をつけて、弾が命中したようにすれば、奴は気分を良くして飛び去って行くだろうよ」と言ったが、おじさんは「あのパンツは一つしかないんだ。それは困る」と心配そうな顔をした。「俺のは一カ月半もはいていたんだ。そろそろ虫の巣ともお別れだ。あなたも、

今度はフンドシにしるよ。手拭いで、すぐに作れるぞ」

やがて戦闘機の爆音は遠のいていった。おじさんは、みんなに向かって、「もう自分の持ち物の所へ戻ってもいいぞ」と叫んでいる。そして、高梁の幹からパンツをはずすと、「無事でよかった。まだ十年は使えるからね」と、一人でつぶやいていた。

奉天に着いたときのことだが、「風のたよりに聞いた話だが、千葉県のグループは全滅したらしい。」と田中のお爺ちゃんが教えてくれた。でも、その冬、春日小学校の体育館で、お爺ちゃんは承徳市の生き残り二十六人とともに餓死してしまつた。これはあとで分かつたことだけだ。

「よくみんな助かったな」と田中のお爺ちゃんが、集まつて来た承徳組の人たちの顔を見ながら喜びの声で言っていた。すると、だれかが「一人だけいません。亜希ちゃんという小学生の女の子です」と言つたので、それを聞いた私はぎよつと

した。「家族が死んで、一人ぼっちになった子か?」「手分けして探そう」と、田中のお爺ちゃんが早速に言っただけで動き出した。私は「最後まで話していたんだよ。あつちに走って行ったよ」十五分ほどすると、大人たちが戻ってきた。私は、何となく予感がしていた。「あの機銃掃射のなかで、生きていくわけがない」と。でも、私は田中のお爺ちゃんに聞いてみた。「亜希ちゃんは見つかったの?」すると、お爺ちゃんは片手を横に振って、「ダメだった。埋めてきたよ」「カコちゃん!」と、伊東の小母ちゃんが、突然私の頭を抱きしめて言った。「あれだけ深く埋めたら、狼も掘り出さないうだろう。忘れなさい」。一カ月ほど前、河の中でソ連兵によってたくさんの方が殺されたとき、伊東の小母ちゃんの赤ん坊も死んだのだった。小母ちゃんが河の中で転んだときに、リュックサックの上には縛り付けていた赤ん坊はふり落とされて、溺れ死んだのだ。私は見たんだ。目の前一メートルぐらいでの出来事だった。そのとき、周りから次々

と声が聞こえてきた。

「犠牲者が一人で良かったよ!」「暗くならないうちに出發しよう。今夜は月が出ないぞ」私は慌てて聞いた。「亜希ちゃんの赤いリュックサックはどうしたの?」と言ったが、喉の奥が震えていた。「中身は、亜希ちゃんと一緒に埋めてしまったよ」私はビクビクして、すぐに聞いた。「その中に髪の毛があったでしょ!」「そんなもん分かるわけはないだろう」その言葉を聞いて、私は走って行って探した。必死だった。すると、高粱畑の中に赤いリュックサックがポツンと転がっているのが見えた。高粱の葉と雑草をかき分けながら、全速力で近づいていく。そして、しなびたリュックサックを拾いあげた。逆さまにして揺すってみたり、手を入れてみたりしたが、何も出なかった。ポケットも見た。でも、ペチャンコのリュックサックだけだった。涙が出そうになったが、グッと抑えた。このとき私は、一歩大人になったような気がした。「なんだ、世の中ってこんなものなのか。

大人の世界ってこんなものなのか。神様だって、都合の良いときだけしか動いてくれないんか。ちくしょう。もうだまされないぞ。もう泣かないぞ。神様のクソツたれが」と一人でしゃべり続けた。

「和子、和子！ 来なさい。もう出発だよ」母さんの声が出た。

それから二時間ほど歩いて野営となった。私は、亜希ちゃんにもらったお札が入っている薬きょうのことを思い出して、リュックサックの中に手を入れた。「あれっ」薬きょうと一緒に髪の毛が出てきた。亜希ちゃんが大切にしていたお母さんの髪の毛と、御守りもあった。「母さん、母さん。どうしてこれが」「田中のお爺ちゃんが持つて来てくれたんだよ。亜希ちゃんのリュックサックには、文字が書いてあったんだって」「そんなの書いてなかったよ」「背負い紐の内側に大きく書いてあったんだってよ」「何て書いてあったの?」「私になにかあったら、髪の毛をカコちゃんに渡して下さい。カコちゃんが内地の土に埋めてくれますか

らってね。亜希ちゃんは、死んだお母さんが忘れられないんだね。優しい子だったからね」私は心の中で叫んだ。「ちがうよ。この髪の毛の中にはお金が入っているんだ。もし、カコちゃんが一人になったときに使えって言ってくれたんだよ。よし、亜希ちゃんとの約束だ。だれにも言わないぞ」と私は心に決めていた。兄ちゃんが近づいて来て「和子どうしたんだ。眉がつり上がっているぞ」と言ったが、私は「うるさい!」とだけ答えた。

「出発」田中のお爺ちゃんの声だ。私たち承徳組は亜希ちゃんが死んだだけで、怪我人は無かった。みんな高粱畑の中に分散していたので、助かったのだった。もし、千葉県の難民グループより先にここに来ていたら、私たち承徳組の難民も日陰を求めて喜んで小屋に入っていただろう。そうしたら、あの人たちの有様は自分たちの姿だったんだと思い、ぞつとした。「出発」という声で、みんなは重い腰をあげて歩き始めた。潰れた小屋の横を通るときには、みんなは頭を下げた。この下

には、敵機に撃たれたとき、足や腰を怪我して走り出せなかった人がいるんだ、と思うと足が重たかった。「あんな所に、まだ残っているよ」私は少し離れた所を指さした。親子連れの死体だった。

死体はさつき全部集めたはずだったので、これは見落とした忘れ物だった。「お人形なんか、そのままにしておきなさい」と母さんが言った。千切れた赤ん坊の手首が、お人形の手をしっかりとつかんでいた。「母さん！ 赤ん坊の手が残っているよ！」と言ったが、母さんは「そのままにしておきなさい」と、一言だけ言った。「狼に食われてしまふよ」私はそう答えたが、母さんはみんなと一緒にどんどん歩いて行ってしまった。私は前に亜希ちゃんがしていたとおりに、手首の切断部にたかっているうじ虫の上から土をかぶせ、さらに高粱の葉をむしり取って、手首が見えないようにした。そして、母さんの後を追って走って行った。母さんに迫り着いてすぐに「母さん、手首に土をかぶせてきたよ。母さん、母さん、聞いているの」

と言ったが、母さんは無言だった。それからも、承徳組の避難行はしばらく続いた。

おわりに

昭和二十二年三月、やっと日本に着いた。ここが、大人たちが「祖国の土を一步でもいから踏んでから死にたい」と言っていた所なのかと思っただが、あまり感激はなかった。

長時間汽車に揺られたあと、母の生まれた故郷、群馬に到着した。ここが、私たち家族の承徳から始まった苦難の終着点だった。そのときの母さんの喜びようといったら大変なものだったし、出迎えてくれた親戚の人たちも同じだった。でも、私はそのことは何でもないことだった。ここは、私の知らない遠い土地なのだ。私の友だちは一人もいなかった。

私と同じように、満州で生まれて満州で育った子供たちは、どんな思いで日本の土を踏んだのだろうか、そのことは今になっても考えてしまう。多分、大多数の子供は「満州の自分の家に帰った

い」と言つて、声には出さなくとも、心の中では泣き叫び続けたことだろうと思う。それにしても、日本の空気は重かつた。

春たちて、野にナツメあり満州の

幼きころの思い出は

山に戯むる、友の影

水清く、星降る大地承徳に

友を招きて酌み交す

人の命の輝きを

## 忘れられない事実

東京都 万代 妙子

### 一 はじめに

父の生家は本家ではあつたが、祖父の時代にたくさんあつた田地畑も無くし、岡山県勝田郡勝間田町の、片田舎に残つたわずかな畑を耕し、細々と暮らしていた。父はその家の長男として生まれ育つたが、村一番の秀才と言われながらも、家計の都合で尋常高等小学校までしか進学できなかった。卒業時に学校の強い勧めもあつて、南満州鉄道株式会社に職を得て渡満をした。我が家の古いアルバムの中に、大連市にある満鉄の野球練習場で、満鉄のネーム入りのユニホームを着てベンチに座っている、若い父のセピア色の写真が一枚残っている。

母は父より七歳下だが、やはり岡山県の片田舎で生まれ育つた六人姉の末っ子だった。女学校